

## 介護学生の自己教育力と職業意識の分析

井関 智美 山岡喜美子 藤井 敬美  
三上 ゆみ\* 塚本 幸恵\*  
瀧崎佐津紀\* 奥山 明香\*

介護福祉学

An Analysis of Self-educating Abilities and Professionalism of Welfare Students

Satomi ISEKI Kimiko YAMAOKA Hiromi FUJII  
Yumi MIKAMI Yukie TUKAMOTO  
Satuki TAKIZAKI Asuka OKUYAMA  
(2001年11月1日受理)

学生の自己教育力と介護職職業意識を高める目的で新見公立短期大学地域福祉学科学生に自己教育力と介護職職業意識を調査し、自己教育力の学年別の状況、介護職職業意識の学年間比較、自己教育力の程度と介護職職業意識の関連について検討した。その結果、自己教育力は①自己の成長・発展の要素が最も高く、③自信・プライド・安定性の要素で低かった。また、2年生が1年生より低かった。介護職職業意識では、a 職業人としての自己向上の要素で点数が最も高い傾向であり、c 職業的自己関与で低い傾向であった。全体的に2年生が1年生より低かった。自己教育力の高群の1年生は2年生より職業意識が高い設問が多かった。これらは2年生の1年間の学習や実習体験が影響していると考えられ、職業アイデンティティ確立の2の段階である“現実を知りショックを受けた”段階であると思われる。学生の職業アイデンティティ確立の段階を知りサポートすることが重要である。自己教育力の低群の2年生は1年生より有意に高い設問数が多かった。そのことは1年間の介護実習等の学習体験の影響が高群者より大きいのではないかと考えられた。

### はじめに

人間は生涯にわたって成長し続けるといわれている。人間としても介護者としても成長し続けるには様々な要因が必要である。梶田のいう自己教育力はその人の成長に大きく影響していると思われる。自己教育力は自ら学び成長しようとする力であり、卒業後も学び成長し続ける学生を育成することは介護教育に携わる者の課題である。また、自己教育力は介護職の職業意識の形成にも影

響していると考えられる。看護では自己教育力と職業アイデンティティの関連を研究したものがあるが、介護ではこれらの研究は見当たらなかった。学生の自己教育力と職業意識の向上を目的として、本学の介護学生に自己教育力と介護者の職業意識についての調査を行い、その結果を検討した。

## 方 法

対象は本学地域福祉学科1年生55名、2年生62名であった。期間は平成13年4月に一斉にアンケート用紙を配布し記入回答の後に回収した。調査内容は自己教育力に関しては3つの要素（①自己の成長・発展、②自己の対象化と統制、③自信・プライド・安定性）で構成し各要素が10問ずつの計30設問とした。回答は、はい、いいえとし、はいの回答数のみを算定し、全設問、各要素の合計点数及び設問毎の点数を算定した。但し、設問の番号を括弧で括っているものは、設問内容を反転して回答数を算定したものである。介護者の職業意識は波多野らの看護婦アイデンティティ尺度を参考にして6つの要素（a職業人としての自己向上4問、b職業人としての自尊感情4問、c職業的自己関与6問、d職業への肯定的イメージ5問、e職業的規律3問、f職業団体との一体感2問）で構成し、全問で24設問の調査票を作成した。これらの設問はそれぞれ5段階評価で調べ1～5点を配点し4分位（25%位、50%位、75%位）で検討した。

分析は自己教育力の学年別の状況、介護職職業意識の学年別状況、自己教育力の程度（低群、高群）と介護職職業意識の関連について検討した。教育力の程度は合計点数の平均値を基準として基準から標準偏差分を引いた値未満を低群とし、基準に標準偏差分を加えた値以上を高群とした。統計処理はspssで行なった。

## 結 果

### 1. 学生1人あたり平均の自己教育力の状況

自己教育力の学生1人あたりの総合計平均点数は18.4±4.0であった。学年で比較すると、1年生は19.4±3.5、2年生は15.0±4.8であり1年生が2年生より有意に高かった（図1）（T検定、 $P<0.05$ ）。次に自己教育力の3要素毎の1人あたり平均合計点数をみると、①自己の成長・発展が7.7点で最も高く、③自信・プライド・安定性が4.7で最も低くなっており、②自己の対象化と統制は6.1で中間位にあった（図2）。また、3要素

素間で相互に有意差が認められた（ $P<0.01$ ）。

自己教育力の要素の学生1人あたりの合計平均点数を学年で比較すると、①自己の成長・発展への志向の平均合計点数は1年生7.8±1.5点、2年生7.6±1.5点であり、学年間で差はなかった（図3）。しかし、②自己の対象化と統制の平均合計点数では1年生6.4±1.7点が2年生の5.8±1.8点より有意に高かった（ $P<0.05$ ）。また、③自信・プライド・安定性の平均点数においても1年生5.2±1.6点が2年生4.2±1.6点より有意に高かった（ $P<0.01$ ）。

### 2. 自己教育力（各設問）における解答率

次に、自己教育力を詳しく設問毎に見てみたい（表1）。①自己の成長・発展への志向の設問で90%を超えて回答率が高い設問をみると、1年生では「2.自分の能力を最大限伸ばす努力をしたい」53名、96%の1設問であり、2年生は「2」62名、100%、「4.自分でなければやれないことをやってみよう」58名、94%の2設問であった。20%を下回る回答率の低い設問は1、2年生共になかった。回答率を学年別で比較すると、「1.将来

図1. 学年別にみた自己教育力の状況

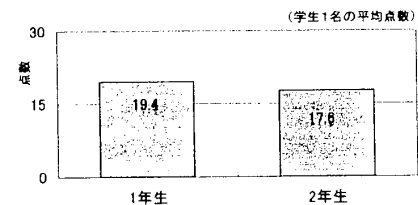


図2. 要素別にみた自己教育力の状況

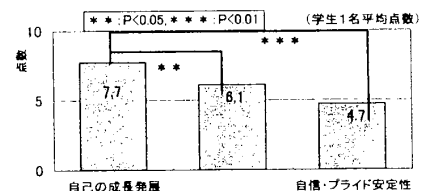
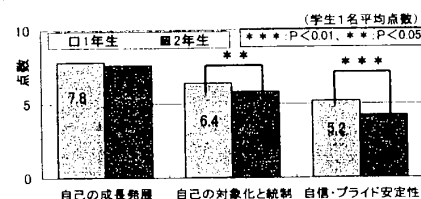


図3. 要素別にみた自己教育力の学年分布



他の人から尊敬される人になりたい」の設問は2年生55名、89%が1年生38名、69%より有意に高率であり（カイ二乗検定、 $P < 0.01$ ）、「10人の一生は結局偶然で決まると思う」では1年生40名、73%が2年生27名、44%より回答率が有意に高った（ $P < 0.01$ ）。

②自己の対象化と統制の設問において回答率が高い（90%以上）設問をみると、1年生では「1.自分の良くないところを考えなおすようにしている」52名95%、「6.腹が立ってもひどい事を言わないように注意している」50名、93%の2設問であり、2年生では「1.」59名、95%、「4.他人から欠点を指摘されると自分でも考え直す」59名、95%の2設問であった。回答率の低い（20%未満）設問をみると、1年生で「2.自分の考えや行動が批判されても腹をたてない」15名、27%、「7.疲れている時は何もしたくない」12名、23%の2設問であり、2年生も「2」12名、19%、

「7」16名、26%と1年生と同じ設問であった。学年差をみると、②の要素の設問では学年間の差はなかった。

③自信・プライド・安定性において回答率が高い（90%以上）設問は1、2年生共になかった。回答率の低い（20%未満）設問をみると、1年生は「(1)今のままの自分ではいけないと思う」3名、5%、「(3)自分自身が嫌になる」11名、20%、「9.今の自分に満足している」15名、27%の3設問であり、2年生では1年生と同じ3設問で「(1)」2名、3%、「(3)」6名、10%、「9」13名、27%であった。学年差をみると、1年生が2年生より有意に高率な設問は「(3)今のままの自分ではいけないと思う」（カイ二乗検定、 $P < 0.1$ ）、「(5)自分のことを恥ずかしいと思うことがある」（ $P < 0.01$ ）、「10.自分にも色々とりえがあると思う」（ $P < 0.1$ ）の3設問であり、2年生が1年生より有意に回答率の高い設問はなかった。

【 単位:回答数 (%) 】

側面	項目	1年生 n=55	2年生 n=62	有意差
① 自己の成長・発展への志向	1. 将来他の人から尊敬される人になりたい	38(69)	55(89)	***
	2. 自分の能力を最大限伸ばす努力をしたい	53(96)	62(100)	
	3. たとえ認められなくても自分の目標に向かって努力したい	49(89)	49(79)	
	4. 自分でなければやれないことをやってみたい	48(87)	58(94)	
	5. やり始めたことは最後までやり遂げたい	48(87)	54(87)	
	6. 社会に出て良い仕事をし、認められたい	46(84)	55(89)	
	7. 自分の志望する職場に何とかして就職したい	48(87)	55(89)	
	(8) 一体何のために勉強するのか時折いやになる	29(53)	29(47)	
	(9) 時々何も考えずぼんやりしていることが多い	29(53)	27(44)	
	(10) 人の一生は結局偶然で決まると思う	40(73)	27(44)	***
② 自己の対象化と統制	1. 自分の良くない所を考えなおすようにしている	52(95)	59(95)	
	2. 自分の考えや行動が批判されても腹を立てない	15(27)	12(19)	
	3. 自分の良いところと悪いところが分かっている	36(65)	34(55)	
	4. 他人から欠点を指摘されると自分でも考えなおすように心がける	51(95)	59(95)	
	5. 出来るだけ自分を抑え他人に合わせようとする	34(60)	30(48)	
	6. 腹が立ってもひどいことを言わないように注意している	50(93)	52(84)	
	(7) 疲れている時は何もしたくない	12(23)	16(26)	
	(8) テレビを見て勉強が出来ないことが多い	26(47)	22(35)	
	(9) ちょっと嫌な事があると不機嫌になる	31(56)	30(48)	
	10. 嫌になった時でも頑張ろうと思う	46(84)	44(71)	
③ 自信・プライド・安定性	(1) 今のままの自分ではいけないと思う	3(5)	2(3)	
	2. 他人に馬鹿にされるのは我慢できない	40(73)	42(68)	
	(3) 自分自身が嫌になる	11(20)	8(10)	*
	(4) なにをやっても駄目だと思う	45(82)	52(84)	
	(5) 自分のことを恥ずかしいと思うことがある	33(60)	18(29)	***
	6. 今の自分は幸福だと思う	46(84)	46(74)	
	7. 自分のやる事に自信を持っているほうだ	22(40)	20(32)	
	8. 生まれ変わるとしたら今の自分に生まれたい	27(49)	23(37)	
	9. 今の自分に満足している	15(27)	13(21)	
	10. 自分にも色々とりえがあると思う	43(78)	39(63)	*

表1. 学年別にみた自己教育力の回答率の分布

注：この表は自己教育力の回答者数を学年別に示したものである設問の番号は各要素ごとに10問ずつとし、それぞれ、番号を1-10までつけている。( )の番号は設問内容の意味を反転して回答者数を算定した。  
 (カイ二乗検定\*\*\*:  $P < 0.01$ 、\*\* :  $P < 0.05$ 、\* :  $P < 0.1$ )

このように、回答率が20%未満で回答率の低い設問数は③自信・プライド・安定性の要素で最も多く、特に2年生が1年生より低い傾向が認められた。

## 2. 介護職職業意識の学年別比較

介護学生の介護職職業意識の要素を対象全体でみると、a職業人としての自己向上の要素が最も点数が高く、c職業的自己関与で低い傾向を示した(図4)。

設問別に4分位でみると、a職業人としての自己向上の要素中では「1.介護者は仕事を通して人間的成長が出来る」の設問の50%位は、1年生5が2年生4より有意に高かった(ウイルクソンの検定 $P<0.05$ )。「4.利用者にもっと良い介護をしてあげたい」でも50%位は1年生5が2年生4より

有意に高かった( $P<0.05$ )。b職業人としての自尊感情の要素では、「8.介護福祉士として仕事をする事に自信がある」は1、2年生ともに50%位が3であるが、75%位が1年生4、2年生3であり、1年生が2年生より有意に高かった( $P<0.05$ )。c職業的自己関与の設問では、「10.介護の仕事は私に適している」の設問の50%位は1年生4、2年生3であり1年生が2年生より有意に高かった( $P<0.05$ )。「11.もう一度職業を選ぶとしたらまた介護の仕事を選ぶ」では、50%位が1、2年生ともに3であるが、75%位は1年生が4、2年生は3であり、1年生が2年生より有意に高かった( $P<0.05$ )。「12.介護の道を選んだことに満足している」の設問では、50%位が1年生は4、2年生は3であり、70%位でも

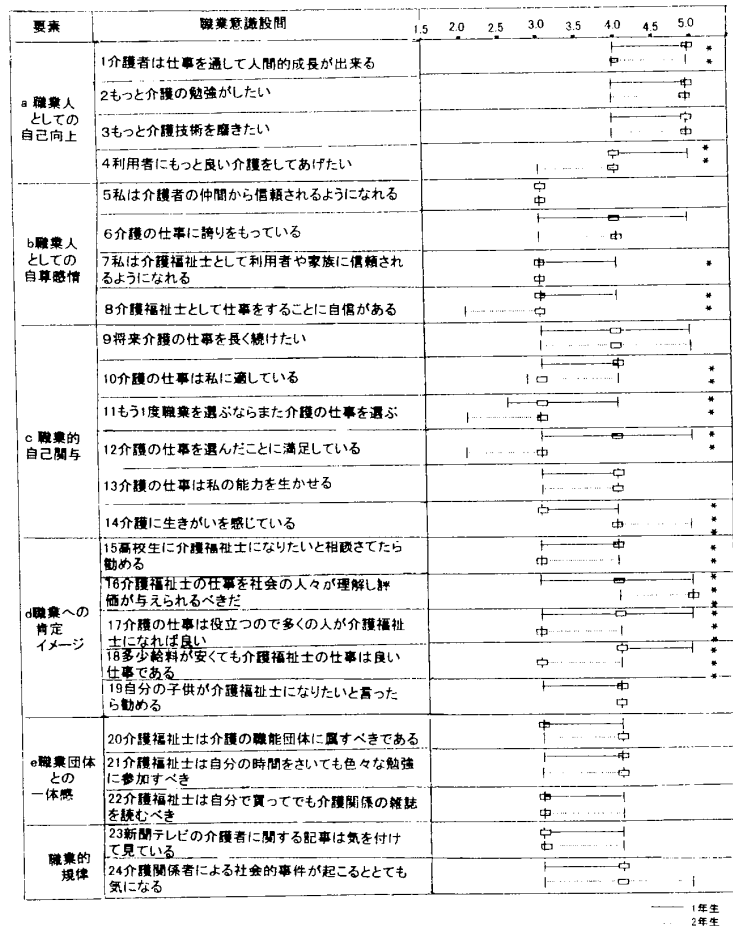
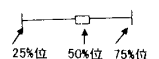


図4. 介護職職業意識の学年別比較

注：この図は介護職の職業意識の学年差をみたものであり、4分位(25%位、50%位、75%位)で示している。(ウイルクソンの検定、\*\*\*:  $P<0.01$ 、\*\*  $P<0.05$ 、\*  $P<0.1$ ) 4分位



1年生が5、2年生は3であり1年生が2年生より有意に高かった ( $P < 0.05$ )。しかし、「14. 介護に生きがいを感じている」をみると、50%位は1年生が3、2年生が4であり、75%位でも1年生が4、2年生が5であり、2年生が1年生より有意に高かった ( $P < 0.01$ )。d 職業への肯定的イメージの要素中では、「15. 高校生に介護福祉士になりたいと相談されたら勧める」の設問では、50%位が1年生は4、2年生3であり1年生が2年生より有意に高かった ( $P < 0.05$ )。「17. 介護福祉士の仕事は役立つ仕事だからもっと多くの人々が介護福祉士になれば良い」では、50%位が1年生4、2年生3であり1年生が2年生より有意に高かった ( $P < 0.01$ )。「18. 多少給料が安くても介護福祉士の仕事は良い仕事である」でも、50%位が1年生4、2年生3であり、1年生が2年生より有意に高かった ( $P < 0.01$ )。しかし、「16. 介護福祉士の仕事を社会の人々がもっと理解し高い評価が与えられるべきだ」では、50%位が1年生3、2年生4であり2年生が1年生より有意に高かった ( $P < 0.01$ )。e 職業的規律、d 職業団体との一体感では学年間の有意差は認められなかった。多くの設問で1年生が2年生より有意に職業意識が高かったが、「14. 介護に生きがいを感じている」、「16. 介護福祉士の仕事を社会の

人々がもっと理解し高い評価が与えられるべきだ」の2設問では2年生が1年生より職業意識の点数が高かった。

### 3. 自己教育力の程度と介護職職業意識の関連の学年比較

自己教育力の程度別に介護職職業意識の学年差をみるために、学年ごとの自己教育力の平均総点数を程度別（低群、中群、高群）に分類した。1年生の平均総点数は $19.4 \pm 3.5$ であり2年生は平均で $17.6 \pm 4.2$ であった。これらを程度別（低群、中群、高群）に分けるために、平均値にその標準偏差分をプラス及びマイナスした値を基準として区分した。1年生は $19.4 - 3.5 >$ 低群、 $19.4 - 3.4 \leq$ 中群 $\leq 19.4 + 3.5$ 、 $19.4 + 3.4 \leq$ 高群とした。一方、2年生は $17.6 - 4.2 >$ 低群、 $17.6 - 4.2 \leq$ 中群 $\leq 17.6 + 4.2$ 、 $17.6 + 4.2 \leq$ 高群と分けた。

介護職職業意識を自己教育力中の、特徴のあった低群及び高群で学年比較し有意差のあるものについてみてみたい。

まず、自己教育力低群者の職業意識を4分位で2年生が高い設問をみると、「2 もっと介護について勉強したい」では50%位が1年生2.75、2年生4.25であり2年生が1年生より有意に高かった (図5) (ウイルコクスン検定、 $P < 0.05$ )。「8.

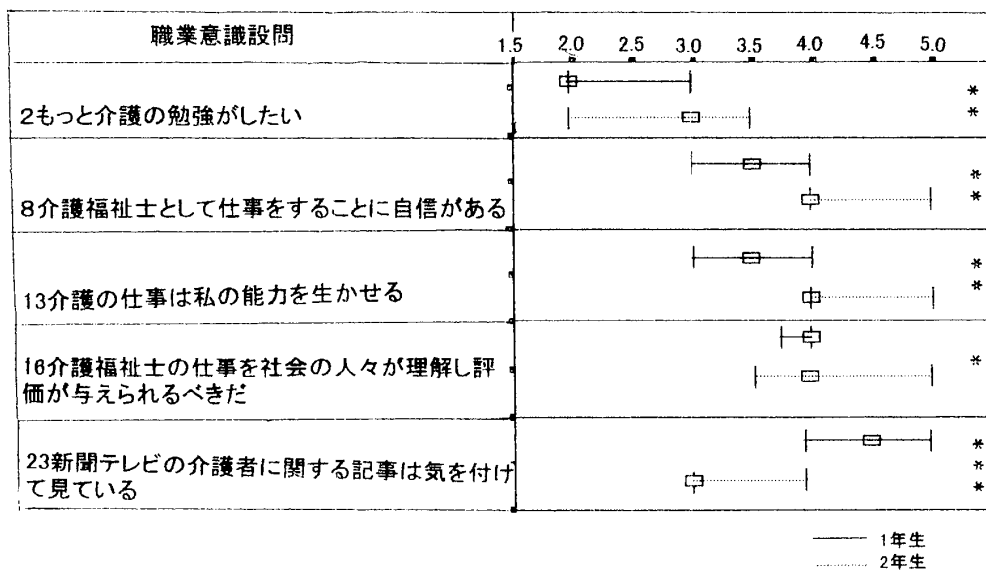


図5. 自己教育力低群者の介護職職業意識の学年間の差

注：この図は自己教育力低群の者の職業意識の学年間に有意差がある設問を4分位（25%位、50%位、75%位）で示したものである。（\*\*\*： $P < 0.01$ 、\*\*  $P < 0.05$ 、\*： $P < 0.1$ ）

介護福祉士として仕事をすることに自信がある」の設問では、50%位が1年生3.5、2年生4であり2年生が1年生より有意に高かった（ $P < 0.05$ ）。「13. 介護福祉士の仕事は私の能力を生かせる」では50%位が1年生3.5、2年生4で、75%位は1年生4、2年生5であり2年生が1年生より有意に高かった（ $P < 0.1$ ）。「16. 介護福祉士の仕事を社会の人々がもっと理解し高い評価が与えられるべきだ」では、50%位は1、2年生ともに4であるが、70%位は1年生4、2年生5で2年生が1年生より有意に高かった（ $P < 0.1$ ）。1年生が有意に高い設問は「23. 新聞テレビの介護者に関する記事は気をつけて見ている」では、50%位が1年生4.5、2年生3であり1年生が2年生より有意に高かった。このように、自己教育力低群者の介護職職業意識を学年比較すると2年生が1年生より有意に高い設問が多かった。

次に、高群者の職業意識を4分位でみると、設問「4 利用者にもっと良い介護をしてあげたい」では、50%位が1、2年生ともに3で、75%位は1年生4、2年生3であり1年生が2年生より有意に高かった（図6）（ $P < 0.1$ ）。「12. 介護の道を選んだことに満足している」では、50%位は1、2年生ともに4で、75%位では1年生5、2年生4であり1年生が2年生より有意に高かった

（ $P < 0.05$ ）。「14. 介護に生きがいを感じている」では、50%位が1年生4、2年生3であり1年生が2年生より有意に高かった（ $P < 0.01$ ）。

「19. 自分の子供が介護福祉士になりたいと言ったら勧める」では、50%位は1年生が4、2年生3で1年生が2年生より有意に高かった（ $P < 0.05$ ）。「16. 介護福祉士の仕事を社会の人々がもっと理解し高い評価が与えられるべきだ」の設問では50%位が1、2年生ともに4であったが、75%位は1年生4.25、2年生5であり、2年生が1年生より有意に高かった（ $P < 0.1$ ）。

## 考 察

### 1. 介護学生の自己教育力の程度とその影響

自己教育力は全体的に2年生が1年生より有意に低く、設問毎でも1年生が多くの設問で2年生より高くなっていた。特に要素別の②自信・プライド・安定性の要素で2年生が低くなっていた。2年生は1年間の学内学習や施設での介護実習体験から自分の力の限界を体験的に知っている。このように自分の未熟さを知ったことが③自信・プライド・安定性で2年生が低いことに影響していると考えられた。

### 2. 介護学生の介護職職業意識の状況

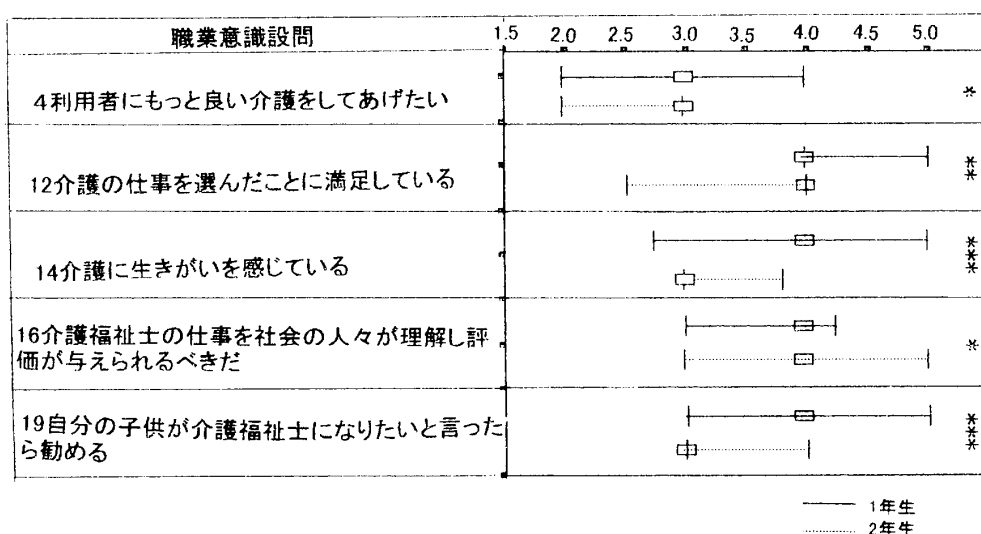


図6. 自己教育力高群者の職業意識の学年間の差

注：この図は自己教育力高群者の学年間で有意差がある設問を4分位（25%位、50%位、75%位）であらわしたものである。（\*\*\*： $P < 0.01$ 、\*\* $P < 0.05$ 、\*： $P < 0.1$ ）

介護職職業意識を全体の要素別でみると、a 職業人としての自己向上の要素の点数が最も高い傾向であったが、b 職業人としての自尊感情の要素の点数が低い傾向を示した。介護職を通して自分自身に対する課題を乗り越えるような自己向上の要素は点数が高い傾向であった。しかし、設問にある仲間や利用者から信頼されるや、自信、誇り等の自尊感情の設問で点数が低くなっており、青年期の自己アイデンティティ確立の時期であることが関連していると考えられた。

学年別では多くの設問で1年生が2年生より有意に職業意識が高かった。職業アイデンティティの確立は、①ロマンティックな職業への憧れ、②職業の現実を知り失望、③職業アイデンティティの確立の3段階を呈するといわれている。1年生は①ロマンティックな職業への憧れの時期であり、2年生は②職業の現実を知り失望の時期であると考えられる。しかし、2年生は「14. 介護に生きがいを感じている」、「16. 介護福祉士の仕事を社会の人々がもっと理解し高い評価が与えられるべきだ」の設問で1年生より有意に高くなっていた。2年生の職業意識が介護に生きがいを感じることや介護福祉士が社会に認められたい等の意識で高くなっており、職業アイデンティティ確立の兆しではないかと思われた。

### 3. 自己教育と職業意識の関連

自己教育力とし職業意識は相関関係にあるといわれているが、本研究でも0.32の正の相関が認められた。

自己教育力低群者の介護職職業意識を学年間で比較すると、学年間で有意差のある設問は5つあった。その内4つで2年生が1年生より高く、1つで1年生が高くなっていた。低群者の2年生が1年生より職業意識の高い設問が多かった。このように低群の2年生の職業意識が高かったことは、低群の者では介護の学習や介護実習の影響が点数の高さにより強く影響していると考えられ

た。

自己教育力高群者の職業意識では、1年生が2年生より高い設問が多かった。高群の2年生が低い傾向は2年生の全体の職業意識の傾向と似ており、高群者が職業アイデンティティ確立の段階が進んでいるとはいえないことが分かった。

自己教育力は、③自信・プライド・安定性で低く、また2年生で低かった。職業意識は、b 職業人としての自己関与で、また2年生で、或いは自己教育力の高群の2年生でいずれも低くかった。青年期は自己のアイデンティティ確立の時期であり、自己のアイデンティティは一時的に拡散され、その後統合されるといわれている。介護学生である学生は職業アイデンティティの確立の時期にさしかかり、自己教育力や職業意識が一時的に低下しているものと考えられた。アイデンティティの確立の段階をスムーズに通過し、自己教育力の強化や介護職の職業意識の強化が出来るように、青年期の学生の心理状態を理解するとともに、暖かく見守りサポートすることが重要であると考えられた。

今回は調査時期が中間的で、対象は横断的となり、自己教育力や職業意識の変化を明確に出来なかった。今後は、対象の縦断的な調査とし卒業時や卒業後の介護職従事者を加えて調査し検討したい。

### 参考文献

- 1) 梶田毅一：自己教育への教育、明治図書、pp25-28、1987
- 2) 原厚子：本校学生の自己教育力の現状と看護職アイデンティティの関係、看護教育学会誌、pp153-155、1998
- 3) 波多野梗子他：看護学生及び看護婦の職業的アイデンティティの変化、日本看護研究学会誌、16(4)、1993